

とたんギャラリーのダイニングデスク 第三回 <b>エコのパズル</b>	日	2007年3月31日(土)
	時	15:00~16:30
	場	阿佐ヶ谷住宅集会所(阿佐ヶ谷)

パネリスト	長崎剛志、野田岳仁、マエキタミヤコ、大川幸恵
質問者	質問者1、質問者2
ギジロク作成者	渡邊美輪子、新井友香

議事内容	注釈
------	----

**【「エコ」の解釈】**

地球の地表前後1kmの層に存在する生態系が繋がってできているのがエコシステム。それを略して「エコ」と言っている。(マエキタ)


→僕自身は「省エネ」であったり、「リサイクル」であったり、その人それぞれが身近にできることそのものが「エコ」だって思っている。(野田)

→ご飯を食べるときに「このお米はどうやってできているのかな」って思うことも「エコ」。今は目に見える目安があまりないからコンシャスになりようがないけど、仕組みを作って、「エコ」な情報をもっと外に出て行ける世の中になっていけたらいいと思う。(マエキタ)

→地球で使える水の量は0.007%、その7%が食べ物に使われているので、食べ物を残さずきちり食べるということが「エコ」になる。食べ物に使われている水のことを考えるということがあまりされていないけど、考えてもらえるようにわかりやすい指標を出していかないといけないと思っている。(野田)

→木を植えたり、彫ったりする時に得られる「感覚」というものが大事なのではと思う。その上で言葉の危険性を感じていて、「エコ」という言葉を使う人や企業によっては矛盾した感じを受けるんです。「エコ」という言葉が逆の効果を与えているのではないかという気もする。(長崎)

→いろいろなフィルターがかかって歪められているとも言えるし、「エコ」という言葉の使われ方が多様化してしまっ、上っ面だけになっているようにも感じる。(大川)



※ 「注釈」は青、「本日のメタ」は赤で表示しています。

**【「エコ」を認識する方法】**

「エコ」を感じる境は人によって違う。数字で認識できる人と感覚で認識できる人がいると思う。(マエキタ)

→ワークショップなどで「これがエコだ」って教えられるのではなく、「エコ」って名づけられていないでやっている行為が「エコ」に繋がっているというのが好ましい。(長崎)

→「アンチエコ」の進行をストップさせる手法として、声に出して「エコ」を伝える必要があるのではないか。(マエキタ)

→「エコ」という言葉は一方からではなく、**多面で見るとのもの**ではないか。(大川)  
→企業が「エコ」を使うとイメージがよくなるように、「エコ」っていうと聞こえがいい。みんな都合のいいことばかり話すのではなくて、都合の悪い話もしようというための言葉ではないか。汚染の話も原子力の話も「エコ」の一部なんだから話そうって使える。(マエキタ)

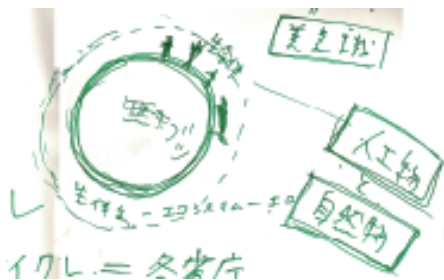
## 【二つの「自然」】

長崎さんは庭を通して、「自然物を扱う」と「自然物を作る」ということとのバランスをどのようにとっているのか？(大川)

→僕の場合、庭は「人工物」という感覚がある。人が植えるわけだから、その環境は自然の環境とは違う。だから人と共存できるようにコントロールしてあげなくてはならない。僕は制作を通してコミュニケーションができて、エコロジーの感覚が自分に生まれる。見てるだけだと生まれにくい。庭を手入れするなど自然をコントロールすることをしないとエコロジーの感覚って養っていけないんじゃないか。(長崎)

→「エコ」という時点で人間が介在していて、**人間の全く存在しない自然**ではなく、**人工的な自然**という意識が私にはある。(大川)

→「自然のままに」という言葉が影響しているかも。大自然や野生の「自然」と庭の「自然」は同じ「自然に」という形容詞を使えることができて、その自然観には違いがあるから言葉のややこしさは宿命にある。(マエキタ)



(DD MAP Ookawa wrote)

## 【「エコ」の伝え方】

人と自然が繋がっている姿を取り戻さないといけないと思っているが、国に頼るのではなく自分でそうしたことを伝えていくにはどのような方法があるのか？(質問者1)

→講演会などだけでなく、クラブイベントに乗せて水の映像を流したり、奄美大島の唄者の方を呼んで、自然と人との付き合い方を伝える島唄を歌ってもらう**京都の貴船神社**※1でのイベントなどでは多くの人に参加してもらった。また、フライヤーも捨てられやすい普通のA4サイズではなく、持ち帰ってもらえるよう小さいサイズにしたり、中を読んでもらいやすいように折りたたんだデザインにしたり、クリエイティブでもアートディレクターの方たちに協力してもらいながら行っている。戦略的にいろいろな世代の方々、好みに受け入れられるように工夫してやっていかなければならないと思う。(野田)

→何か発見したら、それを口コミでも伝えると一人からでも一月で多くの人に伝わる。どういう打ち出し方なら人に気軽に広まるかということを考える。その一つとして友達に喋るときもそういうことを考えながら喋るといいと思う。(マエキタ)

※1 貴船神社  
京都府左京区にある水神である高麗神（たかおかみのかみ）を祭る神社。野田さんが代表を務めるwaterscapeは02年に「水の音楽祭」を行った。  
HP:<http://www.kibune.or.jp/jinja/>

## 【きっかけとしての「フェチ」】

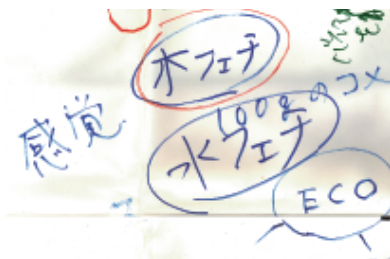
野田さんが水に対しての活動をし始めるきっかけは？(大川)

僕の故郷に長良川という大好きな清流があった。その支流の汚染された水が長良川に流れ込んでしまうのが嫌で、小4から小6まで写真を撮って記録したり、水質調査キットで調査して

水質や地形の変わるということを知って何とかしたいと思うようになった。大学で緊急性の高いアフリカの水問題など知ってから、それを伝えていくようになった。僕は元から**水フェチ**というのがある。(野田)

→僕はもともと木が好きで、**木フェチ**だった。木が好きで触れたくて木版画をやっていたが、その後木に関わる仕事がしたくて庭の仕事についた。(長崎)

→私は子供のクラスのお父さんに自然保護協会の方がいて手伝いでパンフレット作りやブランディングをしたことが始まり。会社ではチームでしていることを空いた時間で一人でやった。それが繋がって、連鎖反応で今に至っている。(マエキタ)



(DD MAP Noda wrote)



(DD MAP Nagasaki wrote)

## 【ファッション化する「エコ」】

「エコ」がファッションナブルになってきたことはよいと思うが、その先に政治や経済などが関わってきて、ファッションナブルな「エコ」では一歩踏み出すにはまだ力が無いように思うが。

(質問者2)

→私はそうは思っていない。アメリカにインディーズの**デモクラシーナウ**※2っていう良識のあるニュースを流すメディアがあるが、そのアンカーウーマンがとても弁が立つ論客なのにとっても化粧っけが無い。例えばその人が監修して、もっと化粧っけのある女性をアンカーウーマンにすることっていいと思う。つまり民衆が近づきやすい形にしてあげる。シビアでヘビーなニュースをファッションナブルに伝えることに今とても興味がある。(マエキタ)

A: 原子力とか伝える場合にタブーな事柄があると思うが、ファッションナブルならタブーも伝えらるか。

→伝えられると思う。タブーって伝えることをしていない事だから、それを伝えてみたらどうなるのか、逆にどうたたかれるのか見てみたいと思う。(マエキタ)

※2 デモクラシーナウ  
北米500局以上で放送されている非営利の独立系ニュース番組。  
HP:<http://democracynow.jp/> (日本版サイト)

## 【本日のメタ】

「**木フェチ・水フェチ**」、「**エコと多面性**」、  
図(人が関わる自然と野生としての自然)



## 【本日のまとめ】

最近、あらゆるところで耳にする「エコ」という言葉。しかし、いろんなところで使われていて胡散臭さまで感じてしまう。そうした「エコ」にまつわる物事をもう一度振り返って、「エコ」というパズルを解くというのが今回の趣旨の一つだった。

まず「エコ」という言葉の解釈というピースからディスカッションが始まった。4人の解釈の違いから「数値」と「感覚」とでエコの認識が分かれることが見出された中で、長崎さんから出たのが「エコが都合のいいように使われているのでは」という疑問。確かに「エコ」が氾濫している世間では「エコと言いながら都合の悪いことを隠していないか」と感じることも多い。実はその疑問を解く鍵は「エコの種まき人」マエキタさんが冒頭に出した「エコシステム」にあった。「エコ」は点としてあるのではなく、全体としてある概念。「エコは一方的ではなく**多面的なもの**」、だから都合悪い部分もエコの一部なのだ。

ディスカッションの中盤、「エコ」の重要なピース、「自然」に話が及んだ。サステナブルな自然を作るには自然をコントロールする必要があるが、それを庭師長崎さんは自然とのコミュニケーションとしても考えていた。そこからも「エコ」を考える上では、**人と共存する自然と野生のままの自然**という二つの自然観が重要性を帯びてくる。マエキタさん、野田さんのエコ活動は自然と人が共存していくための活動であるとも考えられるのだ。

「エコ」という言葉で括られてしまいがちのパネリストの方々の活動ではあるが、野田さんは小さな頃からの「**水フェチ**」、木に登り続けたいという長崎さんは「**木フェチ**」と、それぞれ活動のドライバーは自然への愛着にある。「自然が好き」という言語化できない感覚が私達の住む世界の持続可能性を担っているのではないだろうか。

「エコ」をテーマにした今回の収穫は、「エコ」という言葉ばかりを気にして見過ごしてしまうピース達の存在を改めて考えられたことでなかっただろうか。「エコ」は難しいものではなく、身の回り全てが「エコ」だということ。明日からそれをちょっと考えるだけでも、世界が違ってくるのではないだろうか。

(渡邊美輪子)